

『絹布に包まれた落とし子』

若林は、一説に、この土地一帯が繁茂した林であり、「観音森」と「火の宮森」と呼ばれていました。畠山氏が城を築いた時、この一帯から用材を切り出したと伝わっています。

その昔、用材を切り出した「観音森」の近くに納屋がありました。ある日、その納屋から赤子の泣き声があるので、持ち家の人びとがびっくりして納屋へ入ってみました。すると、そこには「丸に二の字㊦」の紋がついている絹布に包まれた、丸々太った男の子がいるではありませんか。びっくりして、近所の人たちに知らせると、先ほど小さな包みを持った城の木樵がうろついていたのを見たという人がいました。

「その木樵が置いていったのではなかろうか。」「どうすることもできないだろう。」と話し合っ、その赤子を大切に育てました。

その子は、「畠山氏の落とし子」だったのではないだろうか、と語り伝えられています。その後、この家の娘さんと夫婦になって、末長く暮らしたそうです。

(若林町 伝承 武内喜男 集録)

